



寄稿 1ページのたより

私たちが北海道へ避難したのは2011年の7月でした。

震災が起きた当日、私自身は「絶対に復興するんだ」と考えていましたが、その矢先に原発事故が起こり、復興を考えている状況ではなくなりました。

子どもが3人いますが、当時は5歳の長男、3歳の次男、7ヶ月の三男とまだ小さかったこともあり、原発事故により一体どうということが起きていて、これから何が起こるのか全くわからず、インターネットや放射線に関する本などで健康への影響を調べながら、焦りの中で生活していたのを思い出します。

住んでいたのは福島県郡山市でしたが、放射線量の高さから子ども達を外で遊ばせることができないため、休日には線量の低い他県まで遊ばせにっていました。でも、その遊ばせていた場所の線量も高かったことが後で分かることがあり、被曝を避けて生活することの限界と同時に、精神的にも限界を感じはじめ、避難をすることと避難先について妻と話し合っていました。

当時は全国に避難の受け入れ先があり、長野県なども候補にありましたが、被曝を避けるならば遠い方が良いと思い、北海道への避難を決めました。

北海道に来てから、今この記事を書いている時点で、12年が過ぎていますが、当時を思い出しても踏み出して良かったと思うことが多くあります。

被災したから分かるのかもしれないが、当時は福島県の中で生活していると客観的に状況を見ることが難しく、遠くから冷静に被災地のことや原発事故について受け止められたいことは、精神面での負担を減らす大きな手助けになりました。

避難を決めて実際に北海道に来るまでは、新しい生活や人間関係などへの不安もありましたが、私たちが入った避難先は雇用促進住宅の大きなマンションで、道内でも多くの避難者がいたこともあり、同じ気持ちで避難してきている人達と知り合うきっかけになりました。

北海道の避難者を受け入れる体制にも驚きました。廃止の予定だった雇用促進住宅を避難者用に利用を決めた行政の動きもそうですが、民間のボランティアの皆さんには北海道での生活や学校に入る時の準備品の提供など多岐に渡って支えていただきました。今でも感謝しきれません。

そんな中で、私は避難した側ではありませんが、避難を考える人たちが活動に協力させてもらうことになり、今までの生活とは全く違う環境に身を置くことで、それまで真剣に考えてこなかった災害や社会的弱者となることに関心を持つきっかけになりました。

今年には新年になり早々に能登半島地震が起こりました。東日本大震災

からの12年の間にも、熊本地震や北海道でも胆振東部地震がありましたし、水害に至っては全国各地で毎年のように起きています。

その災害の数だけ被災した人がいて、今も能登半島を中心に災害による困難と対峙している人がいることを考えると、つい自分の経験は小さいことだと考えています。けれども、原発事故は誰もが初めての経験であり、被害から逃れるために考えて行動した人は過去にもあんなには居ませんでした。

次に同じ思いをする人をつくらなために、今現在も進行中の原子力災害ですが、この経験を伝えていければと思います。

(ペンネーム 耕司)

見えないものから見えたもの



辛く悲しい…でも負けないで!と、心から願います。